
モンスターハンターポータブル3rd プレイ日記風小説

あやさわ しいね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンターポータブル3rd プレイ日記風小説

【Nコード】

N2323T

【作者名】

あやさわ しいね

【あらすじ】

山間の温泉郷、ユクモ村。そこを訪れる、一人の若い女ハンター。そこで彼女を待ち受ける戦い、苦難とは――？ ゲーム「モンスターハンター」シリーズの最新作、「モンスターハンターポータブル3rd」を下敷きにした二次創作小説です。タイトルにもあるように、筆者自身が実際にゲームをプレイしながら感じた経験などに、筆者独自の解釈を加えて小説風の味付けをしたものです。なるべく、未プレイの人にも読みやすいよう（そして、モンスターハンターの世界観に興味を持ってもらえるよう）に、後書きなどで世界観の補

足をしていけたらと思います。完全に趣味物書きのため、文章は拙いですが、読んで頂ければ幸いです。

1. 邂逅と始まり

浅い霧の立ち込める山道を、彼女は渡っていく。

緋色の、ゆったりとした道着のような服装を身に纏い、頭には藁でしつかりと織り込まれた被り笠。動き易くも過ぎし易い、旅装としてはぴったりの衣服だろう。地を踏みしめる一步は、長い――先人たちによって拓かれた、それなりに平易な――山間の道を歩いてきた疲れを微塵も感じさせない。独特なシルエットを霧に写しながら、足取り軽く彼女は道を進む。

道の周りは、永くこの山に根を下ろしているであろう、瑞々しい葉や花を咲かす草木に囲まれている。風一つ吹かない中、霧に包まれ静謐の中に佇む「彼ら」に、じつ、と見つめられている感覚にとらわれ、彼女はふと、微かな畏怖の念を抱いた。今まで平然と歩いてきた風景が、何とはなしに少し変質したように感じられた。まるで……自分がこの先を進むにふさわしい者なのかどうか、見定められているような気がしたからだ。

思わず。足を止め、その場に立ち尽くす。しん、という音すら聞こえてきそうにもない、絶対の静寂。聞こえるのは、体の中から響く、自分の心の臓が血を送り出す時の鈍い音だけだ。

息をいっばいに吸い込む。冷たい山の空気が、肺の中を満たすのを感じる。

自然は、いつだって私たち人間に厳しい。

その中で、彼らに正面から向き合えるかどうか。

すべて自分次第だ――彼女は自らにそう言い聞かせる。「彼ら」は、とてつもなく強大な「力」だ。生半可な気持ちでは、「彼ら」に認められるなど、到底不可能だろう。一步間違えば、「彼ら」の怒りに触れ、自分のちっぽけな生命など、いともたやすく奪われる。突然、ざあつ、と勢い良く風が、彼女を、彼女の進む山道を通り過ぎる。木々が一斉に、風に揺られて騒々しくさざめく。――そう

だ、お前など我々の前では取るに足らない存在に過ぎない——あたかも、そう彼女に語りかけるように。

風が止む。

気合を入れなければ。

もう一度深呼吸。笠を被り直し、再び道を歩き出す。しかし数十歩も歩かないうちに、彼女は再び足を止めることになった。突如、左手に続いていた木々や草花の壁が途切れ、そこに風景が開かれたからだ。

低く垂れこめた雲霧から、剣のように険しい、灰色の岩肌剥き出しの頂を持つ山々が、悠然とそこに立っていた。そんな中で、逞しい木々たちが、緑や紅みがかった葉を精一杯伸ばし、自らの生を主張している。

なんて美しい眺めなんだろう。

この世のものとは思えない荘厳さを湛えたそれを前に、彼女は感嘆した。彼女には絵の心得は殆ど無かったが、今なら絵描きたちの心情が理解できるような気がした——自分の眼だけに焼き付けるのは勿体無い、この美しさを、誰かに伝えたい。人が作り出したものとは違う、二度と見ることは出来ないものかもしれない、だからこそ、形として残しておきたい……そう願うのかもしれない。

一瞬、鳥の鳴き声が聞こえたような気がして、彼女は上空に眼をやる。ちょうど、一羽の大きな翼を持った鳥が、彼女の頭上をやり過ぎて、山々へと向かって飛んでいくところだった。それを見て、彼女は何故か安心を覚えた。自分以外の、息遣いを持った生き物の姿を見て、この厳しさと美しさを持った静謐の中で「動いて、生きている」のが自分だけではない——孤独ではない、と感じられたからだ。

自分もまだまだ未熟だな、と彼女は苦笑した。

そうしてしばらくまた、彼女は風景に見とれていたが、不意に微かな音が聞こえてくるのを感じた。それは草木が風に揺られてさざ

めく音でも、生き物の呼吸する音でもない。この場では明らかに異質な感覚を持つその音は少しずつ大きくなっていき――やがてそれが、彼女の後方から響いてくるものであることに気付く。

それは、木製の車輪が石の多い地面を嚙んで進む音だった。霧の中から姿を現した荷車の姿を彼女は見つける。荷車は徐々に速度を落とし、彼女の真横に停車した。

荷車は、大の大人ほどもある大きな鳥竜種に引かれていた。ふっさりとした、青緑がかった毛に覆われている。ぱっと見ただけでは名前が思い出せないところを見ると、彼女が元居た地方ではあまり見かけることのない種なのだろう。ふとその荷車の上から、にゃあ、という鳴き声と共に、

「これはこれは。旅の方がお一人でこの山道を往くというのも珍しいですニャ」

と、ややかん高い、奇妙な語尾の言葉が彼女にかけられた。

「どちらへお出でのですかニャ？」

そう言いながら、立ち上がってこちらを見下ろしたのは猫だった。少し白の混ざった、明るい灰色の毛並みを持つその猫は、二本の足ですつくと立ち、くりつとしたガラス玉のような大きな瞳で彼女を見つめていた。

「この先にある、ユクモ、という村に参るところです」

笠を少し上げ、顔を晒しながら、彼女は微笑みと共に丁寧に受け答えた。凜としながらも、どこか幼さの残る――少女と言っても差し支えない――声と容貌。

彼に対して礼を失することは、人に対して礼を失するのと同じことだ。そして、彼女はそれを良とする人間ではなかった。

「ほう、ユクモ村ですかニャ。あそこは温泉の名所として有名ですニャ、私もたまに、仕事の復路で、汗を流しに立ち寄ることも有りますニャ」

一瞬、身をふるりと震わせながら――その温泉の温さでも思いつ出したのだろうか――、彼は続ける。

「ユクモであれば、道中半ばで通りすがりますですニャ。如何でしょう旅の方、ユクモまでは徒歩ではまだまだ時間がかかりますニャ。もし、この小汚い後ろの荷車で良ければ、そこまでお乗せしますがニャ？」

彼女は思わず笑みを深くした。この美しい風景の中を歩いて進むのも風情があつて悪くはないが、早く目的地に辿りつけるのならそれに越したことはない。

「これは……願っても無いことです。私こそ、乗せられている荷物
の邪魔にならなければいいのですが……」

「なあに、問題ないですニャ。それに、私も長い道のりをずうっと走ってきて、仕事とはいえ、正直、少々飽いていた所ですニャ。もし良ければ、短い間でも私の話し相手になってはくれませんかニャ」
「私などで良ければ」

「決まりですニャ。そうなれば、早速……ささ、手荷物は一旦こちらに置いて……荷台の手すりが高いので気をつけて……荷物の隙間で申し訳ない……さあ、行きますニャ」

そう言いながら、彼女がしっかりと荷台に腰を据えて乗り込んだのを確認すると、彼——猫の獣人であるアイルーは、烏竜に合図を送り、荷車を出発させた。

よく喋るアイルーだった。よっぽど口を開きたくてしょうがなかったのだろう。彼女もお喋りは嫌いではなかったので、会話は弾んだ。お互い名前も明かさなかったが、旅の道中での出会いなどそんなものだ。最初はお互いの自分の故郷はどこそこのなんだとか、他愛もないところから始まった。

アイルーの話は簡潔ながらわかりやすく——彼によると商人として長いこと生活しているらしい、なるほど喋りが上手いわけだ、と彼女は思った——、やがて次第に、彼女はアイルーの話に惹きこまれていった。とりわけ彼女が愉快に聴いたのは、彼が今までに仕事をこなす中で滞在した、遠い異国の街や場所のことだ。その風景や

そこに住まう人々、そこで起こった出来事、自然の生きものの達の姿。鳥竜を悠々と操りながら生き生きと言葉を紡ぐアイルーの物語に彼女は、時々相槌や疑問や感想を挟みながらも思う。まだまだこの世界には、自分の見たことのないものが山ほどあるのだ。そして、そのまだ見ぬ情景に想いを馳せることの、何と面白いことか。

彼女がそんなことを思っていると、不意にアイルーが会話を止め、空に眼をやりながら、

「……どうにも、一雨来そうですニャ」
ぽつりと呟いた。

「え？」

その言葉を聞いて、彼女も追って顔を上げる。

会話に夢中になっていてわからなかったが……いつの間にか空を覆う雲の色は、白から重苦しい灰へと変わっていた。空気にも僅かに、雨降り前の、水分を含んだ独特の匂いが混じっているように感じられる。確かに、降りそうな気配だ——と、思うか思わないかのうちに、ぽたり、と、空から水滴が落ちてきた。ぽたり、ぽたり、ぽたり。その量は加速度的に増えていき、いくらか瞬きする間で、ざあ、という激しい音を立てて、地上に降り注ぎ始めた。いきなりの大雨だった。

「山の天候は、変わりやすいとは言うけれど——」

彼女は少し声を張りながらアイルーに言う。被り笠が立てる雨音のせいで、自分の声も聞き取りづらい。

「確かに、この辺りは特に天気が変わりやすいが——こんな大雨が突然降るとするのは、私も初めてですニャ」

アイルーもまた、にゃああ、と声を張り上げながら言う。雨はますます激しくなる。笠にのしかかる重みに、彼女は笠に手をやってそれを支える。空が一瞬光り、遅れて、鈍い、ごろごろ、という音が響く。雷が近いのだ。握る手綱を少し振って、アイルーは鳥竜に、落ち着け、ゆっくり、と指示を出す。しっかり捕まれ、というアイ

ルーの指示に、彼女は素直に従った。手綱を取られている鳥竜が、いきなりの天候の変化に興奮しているのが彼女にも伝わってくる。

この状態では、これ以上荷車を速く走らせることは出来ないだろう。雨足はいよいよ強まり、にわかにも風も吹き荒れ始め、すぐ眼前の景色さえ、降りつめる豪雨にかすんで見えなくなっていた。道を囲う木々は、時々悲鳴のような大きい軋みを上げ、それでも体を必死に揺らし、暴風から自らの身を護ろうとしている。

彼女たちが今進んでいるのは、さながら蛇のように曲がりくねりながら下っていく、細く緩やかな坂道だった。もしこのまま、悪天をかわそうと焦って速度を上げれば……一つ間違えば道を外れ、荷車ごと滑落しかねない。

そう彼女が思考する最中、再び上空で、爆音と共に稲光が瞬く。彼女は空に向けていた目を瞑り、再び薄っすらと開け、そして、微かに、それを、見た。

偶然だった。厚い暗雲に映る雷光の残滓。その中に、何か、とてもなく大きなものが蠢いた様に見えたのだ。

（——え？）

それが何なのか、認識する暇も無く——彼女がひとつ瞬きすると、それは再び雲の中へと隠れてしまった。

（——見間違い？）

いや、と、思わず彼女は、吹き付ける雨をものともせず、その目を見開く。彼女は生まれつき、自分の五感——特に、耳目の鋭さにはそれなりの自信を持っている。その眼球に映ったものは、荒れ狂う風に乗って漂う雲の切れ端、というにはあまりに巨大すぎるように感じられた。何より、それは……

また、雷。今度はかなりの大きさだった。草花の蔦が、樹木に一瞬で絡みつくかのように、稲妻が轟音をたてながら雲上を奔る。彼女は、今度はしっかりと被り笠を傾げ目を守りながら、その光の中に目を凝らした。

——あれは。

やはり、一瞬ではあった。しかし彼女の双眸は、正しくその影を捉えていた。

見間違えなどではなかった。

雷光に照らされ、白くなる雨雲。その中に、羽衣のごとき翼をはためかせ踊り出る、巨大な体躯が浮かび上がる。荒れ狂う天を、悠々と泳ぎまわるかのようにくねる、その姿。鳴り響く雷鳴は、自身の存在を地に知らしめるが為の咆哮なのか。

莊嚴。

生きている。

それは、まるで……

——龍？

「うーむ、とんでもないカミニヤリですニヤ！」

にやにやあ、と、不意に飛んできた言葉に、彼女ははっとする。

我知らず、眼前の光景に見惚れてしまっていたらしい——彼女が声の方向に顔を向けると、アイルーもまた、くりくりとした丸い目を荒天へと向けていた。

「これは、下手をすると、一度どこかに留まらなければいかんかもですニヤ。風雨を凌げる場所があればいいのですがニヤ……」

アイルーには、どうやらあの影は見えていないようだ。

「何にせよ、早くこの天氣が通り過ぎるのを祈るばかり……ニヤニヤニヤ！？」

突然、アイルーは驚きの声を上げた。直後に振動。彼女の体勢が僅かに崩れる。不意に荷車の速度が上がリ、風を切って走り始めるのを彼女は感じる。荷車を引く鳥竜が、荒い息を上げながら鳴き、爆走を開始する。

「うわ、待つニヤ、ちょっと、どうしたニヤ！」

アイルーが悲鳴をあげる中、突然、鳥竜の目の前で、ぱちり、と電光が弾けたのを彼女は見た。その光景に目を見開いたのと同時に、彼女の鼻に、奇妙な臭いが入ってくる。何か、空気が焦げているよ

うな……何だ、これは？

ばかり、ばかり、ばちばち。彼女の周囲でも、烈しさを伴った光が瞬き始め、それに眼を取られる。アイルーは、鳥竜を御そうと必死に手綱を引き続けている。

「こら、お、おおお大人しくし——う、ウニヤーツ！？」

獣人の再びの悲鳴に、反射的に彼女が進行方向へと顔を向けると、

そこに、壁が立ちはだかっていた。

出来事は一瞬だった。

従うべき主の制御を失った鳥竜はしかしそれでも、その目の前の障害を、まさに激突するすんでのところで回避した。

だが、それはあまりにも急すぎる制動だった。荷車は右に左にと暴れだし、それによって身体の支えを失った彼女は、その勢いのまま、荷車から振り落とされていた。

落ちる、と頭が認識した刹那、身体は反射的に受身を取ろうとしていた。しかし間に合わず、地面に打ち付けられ、衝撃が全身を襲った瞬間、彼女は思わず息を吐いてしまった。痛みに思考が途切れ、状況把握が曖昧になる。痛覚からの逃避のために解けていこうとする意識を、何とか力尽くで繋ぎ止める。

（——駄目！）

すぐさま身体を起こしながら、彼女は小さく頭を振り、自分の五体が満足に動くのを確認した。同時に思考も再開——どうやら自分の脳味噌はまだ無事のようなのだ。しかしこの山道のど真ん中に、あれだけの大きなものが座しているというのは、いったい——

直後、振動と轟音。

彼女の近くの地面が、びりびりと震えていた。何事かと思う間もなく、続けて、彼女の頭上で巨大な何かが空を切る音が聞こえた。思わず姿勢を低くしながら、

（——壁が、動いている？）

その正体を見極めようと、彼女は視線を上へと向ける。そして、戦慄した。

……壁などではなかった。地面を揺らしたのは、その胴から伸びる、巨木のような逞しい四肢だった。危うく、彼女の頭を、石に打ち付けられた果実のように吹き飛ばすところだったのは、蒼い燐光を放ちながら、力強くもしなやかにしなる尾だった。

それは、口から地響きにも似た唸りを上げながら屹立する、一頭の巨大な獣だった。

全身を美しい蒼色の鱗に覆われたその獣は、しかし彼女の存在を気にも留めていない。

獣は、上空に向かって咆哮した。それに合わせ、脚が地面を再び揺らさんと踏み下ろされ、彼女は危うくその下敷きになるところだった。間一髪で地面を転がり、それを避ける。同時に、自分の腰のあたりに手を伸ばすが、

(――しまった)

顔を苦くする。荷物はすべて、あの荷車に乗せてしまっていた。

彼女の得物も、また。使い慣れたものではないにしろ、あるに越したことはないのに……彼女は素早く周囲を見渡し、一緒に飛散した荷物の中にそれがないかを見たが、しかし無駄だった。

ばかり、ばかり――彼女の周りに、空気を焼け焦がしながら、再びあの電光が瞬く。それは獣の叫びに合わせて数を増やしているようにも見えた。

(いよいよやばいかな)

しかし、今の彼女にはどうすることも出来ない。この獣に気付かれることがあれば、間違いなく自分の命はないだろう。文字通り命運尽き果てたか――と思った一瞬の後、

「旅の方!」

この少しの時間ですっかりと聴きなれた、にゃあああああ、という鳴き声混じりの声が、遠いところから僅かに聞こえた。

反応は早かった。三度、自身を踏み潰さんとする獣の脚をかわし

ながら、彼女は道の縁へと走り寄った。下を覗き込むと、自分が今いる道を折り返しながら下る坂道の続きが、そして、雨に烟るその道をひた走ってくる、あの荷車が微かに見えた。御者の猫の獣人が、その小さい体で何とか荷車の引き手を操りながら、大声で叫んでいる。

「旅の方！ さあ！」

アイルーの放ったその言葉の意味するところを理解して、彼女は一瞬躊躇した。自分の立っている場所から下の道までは、結構な高さがある。その距離の間に、木々が生えていないのは、果たして幸か不幸か。

（――やるしかない）

決断もまた、一瞬だった。タイミングを合わせるために小さく跳躍、彼女は中空に身を躍らせた。

……落下の感覚を感じられたのは、ごく短い時間だった。次の瞬間には、彼女は再びその身を荷車に委ねていた。今度は油断せず、受身を完璧に取っている。

「しっかりと捕まっています！ ニャ！」

アイルーは叫んだが、彼女はそれには応せず、すぐさま起き上がり、高速で過ぎ去っていく後ろの風景に眼をやる。

雨の中、光を湛え、背中の毛を逆立て吠え立てる、蒼色の獣。その視線の先には、雷光が輝く、荒れ狂う空がある。

（――まさか）

果たして、高速で走っている荷車からの景色はたちまち遠ざかり、灰色の風雨の向こうに消えていった。

（まるで、威嚇）

そう、あの蒼色の獣は、空に向かって叫んでいた。俺はここにいるぞ、かかって来い、とでも言わんばかりに。

（やはり、あの影は……）

荒い音をがたがたと上げながら、荷車は一人と一匹を乗せ、坂道を転げ落ちるように走り抜けていく。

会話はなかった。一人と一匹が言葉を交し合ったのは、荷車が山道の起伏をいくつか上り下った、しばらく後のことだった。嵐は、曇天と共にとうに去っていた。降り止んだ雨の雫に濡れる草花が、やわらかい日差しに照らされて光っている。

「……生きていますニヤ」

「……何とか、生きていますね」

ぽつり、つぶやく。そして、再び沈黙。

「……ニヤニヤ」

「……ふふ」

どちらともなく、口から息を漏らし、

「……ニヤニヤニヤー！」

「……あっはっはっはっ！」

声をあげて笑った。

「ニヤー、いやあ、本当に生きていて良かったですニヤ！」

「本当に……くっくっ……どうなることかと……ははは！」

心の底から愉快そうに、彼らは笑う。

あの僅かな時間の中で、恐るべき自然の脅威に、彼らは圧倒され、蹂躪され続けるしかなかった。しかし、そういった中に身を置くことを常とする彼らにとっては、これもまた刺激的な旅的一幕――まだ見ぬ誰かへの語り草となる、そのほんの一部に過ぎないのだ。

先程までの狂乱はどこへやら、山間に笑い声を反響させながら、荷車は山道を行く。

「さあ、旅の方。いよいよ、ユクモが見えて参りましたニヤ」

しばしの旅の相棒とも、いよいよ別れの時を迎えようとしていた。荷車は徐々に速度を落とし、やがて、ぎしり、と車輪を軋ませながら停車した。

「ここまで、本当にありがとう」

荷車から飛び降り、アイルーから荷物を手渡された後、彼女は深

く獸人に頭を下げ、感謝を述べた。アイルーは顔を皺くちやにして破顔し、

「いやいや、こちらこそ。また一つ、取っておきの語り草が出来ましたしニャ。……それでは旅の方、またどこかの街、道すがらで逢うことも有りますれば——良い狩りを」

その最後の言葉を聞いて、彼女は一瞬、きよとし、そのあと微笑みでそれに応じた。彼女の素性について、アイルーには仔細に話してはいなかったのだが、彼にはどうにも分かっていらしい。

鳥竜——この地方に棲む、「ガーグア」という種であるのだと、アイルーが教えてくれた——に合図を送り、アイルーの荷車は再び道を走りだす。アイルーが短いその片腕を左右に振り、別れを告げる。彼女もまた、同じようにしてそれに答えた。やがて荷車が道の向こうに見えなくなるまで、そうしていた。

そして、彼女は振り向く。

始めに目に飛び込んできたのは、朱色に染められた、立派な造りの巨大な門であった。ただ、本来であれば眼に差し込むほどの鮮明さであっただろうその色は、長年雨風に曝されたせいなのか、ややくすんでしまっているように見える。

その門を超えたところに上りの石段があり、その奥から、微かに鼻を突く、独特の臭いが漂ってくる。腐った卵のようなそれを、彼女は一度ならずとも嗅いだことがあった。かつて赴いた、灼熱の火山帯を包んでいたもの——それは、硫黄の臭いだった。その臭いをもたらずのは、何も地獄の業火のごとく燃え盛る溶岩だけではない。

この、山岳に囲まれた地方でも有数の温泉地として知られる村、ユクモ。

彼女はついに、この旅の終着点に到達したのだ。

いや、と彼女は微かに頭を振る。これは、始まりの終わりに過ぎない。これからまた、彼女の新しい物語が始まろうとしているのだ。異質な臭いを乗せた風すらも、彼女に始まりの気配を運んでいるように感じられる。

よし、と彼女は薄くつぶやき、しかし力強く、その最初の一步を踏み出した。

＊

空気によって冷やされた熱気が、一粒の水滴となって髪の上を伝い、やがて下に向かってすつと落ちていく。落ちた先には、ゆらゆら、と蒸氣を立てている湯があり、ぴちゅん——と音を立てて水面に着弾した。

その湯——地の下から湧き上がる天然の温泉に浸かりながら、彼女はゆっくりと深く息を吸い、吐き出した。

周囲はうっすらとした白い湯氣に包まれている。その向こう、正面の所に、自然の岩を切り出して加工したのであろう、湯を延々と吐き出している独特な形をした像が見える。そのすぐ右隣には、一本の大きな木が立っていた。紅葉の季節にさしかかり、その葉の一部は鮮やかな——彼女が先ほど潜り抜けた、あの正門のような——朱色に染まっている。そのうちの一枚が、ひらりと彼女の前に落ちて、湯の上に僅かな波紋を立てる。

涼やかな風が静かに、外場に面した風呂場をさらっていく。一瞬湯氣の幕が晴れ、その切れ間の向こう、遠くの風景には、彼女がここに来るまでに渡ってきたであろう山々が霞んで見えた。

（——露天風呂っていうやつかあ）

彼女はぼんやりと考える。湯の熱さは適度に調節されていて、気持ちが良かった。全身と、それに合わせて思考が弛緩しているのを彼女は感じていたが、そのままに任せた。頬を流れる汗すら、今はそれを心地良いとさえ思える。

（——ええっと。どうしてこうなったんだっけかな……）

眠気にも似た感覚に囚われながら、思わず眼を瞑る。ええと……なんだっけかな……。意識が下降し、あと一步で彼女の手を離れるというところで——

「旦那！ 旦那あ！」

自分の背後から浴びせられたかん高い声に、反射的に身体をびくり、とさせてしまった。湯がばしゃり、と音を立てる。

「は、はいいい！」

声が裏返るのが情けない——と、彼女は声の主の方に振り返りながら返事を返した後、顔を赤く染めた。そんな彼女に構わず、声は続けて、

「湯加減はどうでござんすかニヤ？ ユクモ温泉は最高の温泉でござんす！」

湯気に遮られて見えづらいが、その姿の影と話し方から察するに、声の主はアイルー——この村に住まっているうちの一匹、先程の御者とは別猫——であろう。彼女はまだ少し狼狽えながら、声の聞こえる方へ、首だけを向けて答える。

「え、ええ。とっても、いい加減です」

「それはそれは！ 旦那もここまでの長い旅でお疲れだと思い、さっそくユクモ名物、集会所露天風呂にお連れした次第で……お気に召したようで、いやあほんと良かったでござんす！」

そう言いながら、アイルーは、ごろごろ、と機嫌よさそうに喉を鳴らす。

——そうか。そういえば……。

彼女はふっと、今自分が何故こうしてのんびんだらりと温泉に浸かっているのか、その理由を思い出した。

あの朱塗りの門を潜り抜け、やや急な石段を上がった後、彼女を最初に出迎えたのは、一匹の獣人——今まさに、彼女に声を掛けている、白い毛並みのアイルーその猫——であった。アイルーは彼女を見止めるや否や、

「やあやあやあ！ あなたが件の！ お待ちしておりましたでござんす！ いやあ、長旅お疲れ様でございましたニヤ！ さささ、まっずはこちらの方へどうぞどうぞ！ さあさあ！」

……と、返答する間すら与えず彼女を引き摺り、この露天風呂へ

と導いたあと、どこかへさつと行ってしまったのだ。唐突な展開にさすがに彼女も面食らったが、目の前に暖かな湯気を湛えた温泉風呂を見たたん、ひどく雨に打たれ、一度は泥にも塗れた身体を洗い流したい衝動にかられ、殆ど成り行きで温泉に身を沈めたのだった。

「……ニヤ！　そういえば、自己紹介がまだでしたニヤ。あっしはこの『集会浴場』で、ドリンク屋を始めたものでして……」

ドリンク屋？　集会浴場？　初めて聞く様々な言葉に、疑問符を頭に浮かべている彼女をよそに、アイルー——ドリンク屋は言葉を繋ぐ。

「旦那に、伝言を預かってきてござんす！」

「伝言？」

今度は体ごと、緩慢に振り向きながら、彼女はゆっくりと後を促す。どうにもまだ、湯の暖かさに頭の動きが麻痺しているようだ。

目に映ったドリンク屋は、頭にねじり鉢巻を巻き、緑色の前掛けを垂らしていた。中々に可愛らしい衣装ではある、と彼女は思う。

「ニヤ。実は旦那には、ユクモに着いたらすぐ、村長にお目見えしていただくはずだったんですが……。今日はたまたま『全村会議』っていう、村人衆の代表が集まって話し合う催しがありまして、あっしはそれが終わるまで、旦那をお持て成ししておくように、と申しつかっておりますニヤ。それがついさっき、ようやくと終わりました。それで、村長が旦那にご挨拶したいということで……」

なるほど、と彼女は頷いた。

「そうだったのですね。では、只今参りますので少々お待ち下さい、と一言お伝え下さい。何分、まだこの姿ですから……」

湯に浸かる自分の湯浴み姿を見ながら、彼女は苦笑する。ドリンク屋も笑いながら、

「ニヤニヤニヤ、そうですニヤ。では、着替えが終わり次第、村長のところまでお越しくだせえ。この建物を出て、階段を下りたところに村長がいるでござんす。……では、あっしは村長に言付けを伝

えてくるでござんす！」

そう言うと、ドリンク屋は再び浴場をひよこひよこ、と歩きながら出て行った。それを見届けてから、彼女は身を湯から上げた。番台に向かい——今は誰も座してはいないが——、道着に再び身を包みながら、彼女は自分の身体が温泉に入る以前より、断然軽くなっていることに気がついた。

（疲れが取れた、なんて都合いいじゃないな。物凄く調子がいい……これも、温泉の効能ってやつなのかな……？）

疑問を抱きながら、しかし今は急ぎ、村長に目通りしなければならぬ。彼女は手早く着替えを済ませると、建物の出口へと向かった。

建物を出ると、ひゅう、と涼やかな風が微かに吹き、彼女の、湯上りの火照った身体を心地良く冷やす。

その建物は、村の中でも一番の高台に建てられていたので、村全体の姿をそこから見渡すことが出来た。彼女は辺りを見回す。何れの建物も、後ろにあるのと同様、村の入口にあった門と同じ色の壁面で覆われている。葉が紅くなり始めた樹々と相まって、村全体が朱色に染められているように見えた。

ドリンク屋の伝言に従い、階段を中程まで下りてきたとき、その終わりの袂に、木製の長椅子に座る人影を見つけた。

（あの人が、そうかな……？）

階段を下りきり、その人物に近づいた彼女は、思わず息を飲み、その場で歩みを止めた。

細身の女だった。綺羅びやかな髪留めと簪で綺麗に纏められた黒髪に、淡い紫色で染め上げられた着物と、鵲色ひわいろの肩がけが良く似合っていた。薄く白粉で化粧された顔に、口元の紅が鮮やかに映えている。僅かに上を仰ぎ、そよぐ風を楽しむかのように、眼を閉じて薄く笑っているように見えた。整った顔立ち。

（——なんて、綺麗な人）

思いながら、着物の女の耳が、普通の人間よりもやや尖っていることに気づいて、彼女は心中で納得し頷いた。

（この人……竜人族だ）

はるか昔よりこの大陸に住まう、古の知恵を今に受け継ぐ、普通の人間とは異なる人々。多くの竜人族は皆、人に比べ非常に長命であるのと同時に、容姿端麗でもあるのだ。

——それにしても、同性である彼女から見ても、女はとても美しかった。思わず見惚れていると、

「——あら」

着物の女は彼女に気づき、微笑みと共に、

「これはこれは、お待ちしておりましたわ——」

気品ある、流麗な話し方だった。着物の女は彼女に向き直りながら続ける。

「あら、そちらの道着は——貴女にお送りさせて頂いた品ですわね。嬉しいですよ、お気に召して頂いたようで。……まずは、長旅、お疲れ様でございました。温泉はいかがでした？ ああ、集会所の露天風呂に湧き出ている温泉は、この村の自慢でございますのよ。一度浸れば、たちまち疲れも吹き飛びますわ。——あらあら、わたくしとしたことが、自己紹介がまだでしたね。わたくしが、このユクモ村の、村長でございます。以後、よろしく」

僅かに身体を折り、礼。彼女も慌ててそれに合わせ、礼をする。間髪入れず、着物の女——村長は言葉を繋ぐ。

「この村は気に入って頂けたかしら？ まあ、これから長いお付き合いになるのだし、じっくり馴染んでいって頂ければ幸いですわ。——もう既にお話は聞いておられるかとは思いますが。貴女には、これから……この村の、ハンターになっただきたいの」

ハンター。その単語を聞いたとき、彼女は浮ついた気分から、急速に現実に戻される。

そう、彼女は別段、観光のためにこの地に赴いたわけではない。彼女はある使命を帯びて、ここまでやってきたのだ。

——ハンター。

それは、人に害をなす、「モンスター」と呼ばれる、巨大な生物たち……自然の驚異そのものと言えるそれらに、その身一つで立ち向かっていく者の呼称。

彼女は今日より——この村の専属ハンターとなる。険しい自然の中に住まう、この村に住む人々の平穏と安寧を守る役目を担うために。彼女は身体に力を入れた。

村長は依然話し続ける。少し困ったように、

「以前は、村に訪れるハンターにお願いすることで、何とかやっていたんですけど……最近、少々物騒になってきていて。まあ、その話はまたいずれいたしますわ。……あら！　またわたくしったら、一人で喋ってばかりいて……まだ、お名前も聞いていませんわ。本当にごめんなさいね。それで、貴女は——？」

問いかけられ、彼女はまっすぐに姿勢を正す。

「申し遅れました。私が、『ハンターズギルド』より派遣されてまいりました——ヒイラギ、と申します。よろしくお願いいたします」
笑みを浮かべながら、彼女——ヒイラギは、そう告げた。

1. 邂逅と始まり（後書き）

いかがだったでしょうか。今回は序章ということもあり、プレイ開始時に流れるプロローグ的なムービー、そしてユクモ村村長に出会うまでを書いてみました。本当は、序章とするのであれば、ムービーが終わるまであたりで切るのが適切かと思ったのですが、最後主人公に自分の名前を名乗らせたかったので、やや中途半端なところで終わっています。

いや、「俺は（私は）●●だ！」って名乗って「つづく」ってなるのって、なんかカッコよくないですか？ ……私だけですか、すいません……。

さて、小説のあらすじにもありますように、この小説は「モンスターハンターやったことないんだよねー」な人にも楽しく読んでもらえるように、なるべく未プレイの人にもわかりやすく、ゲーム中に出てくる専門的な用語などは噛み砕いて、説明調で書いています（とはいえ、今回の章ではほとんどそういったものは出てきていませんが……）。『プレイ日記風』をうたう以上、その役目は「もっとゲームをプレイしてくれる人たちを増やす」ことだと思っていますので。

ただ、このモンスターハンターというゲーム、結構暗黙の了解とどうか、ゲームをプレイしてもほとんど表に出てこない設定とというのが非常に多くて……。そのあたりを何となく掴んでいないと、どういう感じの世界観なのかわかり辛いので――シリーズを遊んでいるプレイヤーですらそうなのです――、今回は基本的な世界観と、プレイヤーの分身であり、登場キャラクターの大半を占める「ハンター」について軽くご説明させていただきたいと思います。

【世界観について】

架空の、地球では無いほかの惑星が舞台とされています。地理としては、二つ（ないしはそれ以上）の大きな大陸があり、そこかしこに村や街、ゲーム中に登場する狩場などが存在しています。ただ、この辺りは公式の設定も曖昧で、実際にどうなっているのかはあまり詳しく定められていないようです。現状判明している地図がどうなっているのかを詳しく知りたい人は、「モンスターハンター 世界地図」あたりのキーワードでggると、地理を纏めているサイトなどがヒットしますので、詳しい説明はそちらに譲ります。

現実世界の時代背景に照らし合わせていえば、文化水準は中世あたりのイメージになるのでしょうか。ただしそれは、大きく発展した街などに限り、多くの人々は農耕、狩猟を基本とした生活基盤のもと暮らしています。一方で資本主義社会的な面も持ち、村や街を繋ぐ物流などは、現物交換だけではなく貨幣によっても行われています。

また、かつて“高度な文明”が存在していたこともあるようで、現在のモンスターハンターの世界は、その高度な文明が滅びた後に築かれたもののようです。

この世界には、現実世界で見慣れた魚や虫、哺乳類などの生き物の他に、太古の昔から自然を闊歩する「モンスター」と呼ばれる生命が息づいています。自然の脅威がそのまま形となったような彼らと人は、生活圏の重なりあいもあって、反目しあい、しかし時には助けあったりしながら暮らしています。

【ハンターについて】

ハンターは、モンスターの狩猟を生業とする人々の総称です。ゲームのタイトルである「モンスターハンター」とは、彼らハンターのことを指しているわけです。

彼らはほぼもなく、世界中に点在している「ハンターズギルド」と呼ばれるハンターの寄り合い組織に所属しており、そこから発行される、様々なモンスターの狩猟・討伐依頼をこなしながら収入を得ています。

モンスターという強大な存在に立ちむかわなければならない非常に危険な職業ですが、それゆえに、ハンターとして成功した時に得られる報酬や名誉などは莫大となります。ある種の一攫千金を求めて、ハンターになる人はあとを絶ちませんが、それと同じくらいの命が失われているのも、また事実です。

余談…【モンスターについて】

モンスターは、ゲーム中においてはプレイヤーの前に立ちほだかる敵として描かれています。しかし、たしかに彼らは、人間の生活や命を脅かす自然の脅威であるのには違いないのですが、同時に、人が繁栄していくなかで不可欠な、自然の恵みとしても描かれています。ハンターの身につける武器や防具などの装備はもちろんのこと、人々が日常の生活を贈るために必要なものを提供してくれているのも、またモンスターなのです。

さらに余談…【ユクモ村の地理的位置について】

この節は、未プレイの人には少し優しくない項目になっていますので、読み飛ばしていただいても結構です。

ユクモ村が、モンハン世界のどの位置に存在している村なのかというのは、今のところ明言されていません。ただ、山間の温泉郷である、ということなので、地図上に存在している山脈地帯に近い位置にあるのかもしれませんが。調べてみると、現在ゲーム中に登場したことのある主要な街や村のある大陸の中央に、山脈が長く連なっている地域が存在しているようです。一応筆者のイメージでは、この辺りにあるのじゃないかなー、と。ただ、異なる大陸上にある可

能性も捨て切れません。

では、この辺りで一旦区切りとしましょう。

次回以降は、今回まったく描写されなかったモンスターハンター最大の魅力である「狩猟」について踏み込んで書いていきたいと思っています。

では、またよろしく願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2323t/>

モンスターハンターポータブル3rd プレイ日記風小説

2011年5月13日17時40分発行